

# 誰にでもできて分かりやすい バンブーロッドの目利き方法を紹介します

## ◎ゲスト＝ 川本 勉

かわもつとむ / FLYイナガキ店主

●川本勉氏は日本にフライフィッシングが入ってきたごく早い時期から、風流人の筆名で各媒体へキャスティングおよびバンブーロッドの記事を発表してきた。

バンブーロッドの歴史とビルディングについてもくわしく、本誌連載「もっと知りたいバンブーロッドビルディング」(第69号、第75号)における歯に衣着せぬ竹竿についての解説は話題を呼んだ。

竹竿のバイヤーとして古今東西数多くの名竿をじっさいに手にしてきた川本氏に、〈誰にでも分かりやすいバンブーロッドの目利き方法〉を聞いた。



川本勉氏 / FLYイナガキにて。竹竿を求めているフライフィッシャーはここ数年増えている

「川本さんは連載中でもいい竿」「わるい竿」という表現をされていますが、改めてその定義をおしえてください。

川本 バンブーロッドは道具ですから、道具としてストレスなく使えないという意味がありません。「いい竿」の定義はただひとつ。(ラインのコントロールが短いところから長いところまで、よどみなくできること)

です。いい竿はリーダーだけでも気持ちよく投げられるし、1m、2m、5m、10mと、その竿の限界までよどみなく投げられます。その竿の



店舗を現在の場所に移転して1年。入りやすくなったという声も

どこかに欠点があると、その距離に至ったところでラインがうまく乗らなくなりません。ギャリソンの言う

「リニアアウェーブ」が実現されません。

— その原因は。

川本 2つあります。一つは、縦方向のバランスが悪いこと。バットからトップにかけてモーメントが伝わる過程で、プランクのどこかに弱い部分、あるいは逆に強すぎる部分があると、そこでモーメントの伝達が止まります。

縦方向のアンバランスは、振動になって現れます。バットが極端に太くて急に細くなったと

いい竿の定義はただひとつ。(ラインのコントロールが短いところから長いところまで、よどみなくできること)。(川本)

すると、太いところから細いところへ力が伝わりません。力が行き過ぎようとして、後ろへ戻ってくる。つまり振動が手に戻って伝わってきます。その逆も同じです。ひょうたんのように手前が細くて先が強すぎてもアンバランスとなって、振動が起きます。力がキレイに抜けていけば、モーメントはスムーズに伝わってゆき、ラインに振動は起こらないものです。ラインが飛行している間、感覚はまるで「生きているヘビの尻尾をつかんでいる」ようです。グラスと竹竿のいい竿にはその感覚が分かりやすく出てきます。

— もう一つは。

川本 横方向のバランスです。ガイドが着いている面を腹、その逆を背と呼んでいます。その背腹と両サイドはきちんとバランスしている必要があります。

横方向のバランスが悪いと、振り下ろしたときに、左右のバランスの弱い方へ竿が行きたがります。まっすぐ振っているのに、弱い方へと行こうとして回転するんです。背と腹の強度をどう作るかはデザインにもよります。でもそれを支える両サイド